

鹿児島県の昆虫28

新燃岳の噴火を昆虫は生きのびられるか？

昆虫担当 金井 賢一

平成23年（2011年）1月26日、霧島山系の新燃岳が突然噴火したのは、まだ記憶に新しいと思います。私はちょうど霧島市国分におり、大量の火山灰を含む噴煙が都城方向に流れていくのを、何枚も写真に撮りました。4日後の1月30日、財部から都城を抜けて御池の湖畔まで行ってきましたが、それはもう大量の火山灰が降り積もっていて、雪景色と間違いそうな状況でした。



御池周辺の森の様子(2011/1/30)

さて、その霧島にも昆虫たちは住んでいます。新湯温泉入り口から新燃岳に登る道には、コツバメという

チョウが多いことで有名です。このチョウは春に羽化・交尾して産卵すると、5月中には蛹になり、その後約10か月ばかり休眠して、翌

年の春に羽化します。落ち葉の下などで春を待っていた彼女らも、火山灰の下敷きになってしまったことでしょう。



フジドリシジミ

(写真提供：菊川靖水)

またフジドリシジミなどのゼフィルスと呼ばれるシジミチョウは、夏から秋に食樹の冬芽に産卵します。幼虫は卵の中で成長してから休眠し、温かくなった春、新芽が広がった頃にかえってエサを食べます。新燃岳噴火の後、食樹の枝先にも火山灰はびっしりと積もっています。

このような状況は初めてですので、このまま霧島の彼女らが死に絶えてしまうのか、火山灰の下で健気にも生きのびて、春に新しい命をつなぐのか、しっかりと調査する必要があります。

鹿児島県の地質20

新燃岳52年ぶりに噴火す

地質担当 鈴木 敏之

平成23年1月26日、鹿児島県と宮崎県にまたがる霧島山・新燃岳は午前中から連続的に小規模な噴火を繰り返し、午後には灰白色の噴煙が高さ2000mに達しました。比較的大きな空震とともに爆発地震を伴う爆発的噴火（爆発）も2月20日現在、これまでに12回発生しています。噴煙量、噴火規模ともに統計記録の残る1988年以降では最大級で、鹿児島地方気象台は噴火警戒レベルを「2」（火口周辺規制）から「3」（入山規制）に引き上げました。

2月1日、大きな噴石が火口から3kmを越える地点まで飛散したため、入山規制の範囲を火口周辺半径4km内とし、現在も継続されています。さらに、霧島市では空震でホテルや学校の窓ガラスが相次いで割れ



噴煙をあげる新燃岳 H23.1.27撮影

(提供：成尾 英仁 氏)

たり、人がけがをしたりする被害も出ています。空震とは、爆発による空気の急激な圧力変化によって波のように震動が伝わる現象です。一般に人が感じる空震の大きさは10パスカル以上とされ、30パスカル以上だとほとんどの人が感じると言われていています。また、数百パスカル以上になると窓ガラスが割れるなどの被害が出るとされています。今回の空震の被害状況からも現在の噴火活動がいかに大きいものかがわかります。

また、新燃岳噴火に伴う火山灰の影響で心配されるのが降雨による泥流・土石流の被害です。長崎県島原市では、雲仙普賢岳の噴火後、10mm程度の雨で土石流が発生しています。

今後も活動が長期化することも懸念され、防災面で最大限の注意が必要です。



火山灰をかぶった高千穂峰・御鉢 H23.2.7撮影 都城市夢見ヶ丘より